

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の比較：
日本語・中国語・韓国語・英語を母語とする大学生
の日本語作文を対象に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-07-12 キーワード: 接続表現, アカデミック・ライティング, 日本語母語話者, 日本語学習者, 習熟度 作成者: 伊集院, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000280

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution 4.0 International License.



日本語母語話者と日本語学習者の接続表現の比較

——日本語・中国語・韓国語・英語を母語とする大学生の日本語作文を対象に——

伊集院郁子

東京外国語大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本研究では、同一課題、同一条件で執筆された意見文（日本語母語の大学生による 144 編、中国語・韓国語・英語母語の日本語学習者による 144 編）を対象に、文頭の接続表現（125 項目）の使用にどのような特徴が見られるか分析し、日本語習熟度によって接続表現の用例や文章展開にどのような相違が見られるか考察した。その結果、以下のような特徴が明らかとなった。

- ①総文数に対する文頭の接続表現の出現率は、母語群が 34.2%、学習者群が 30.0% で、母語群の方が学習者群より高く、学習者の日本語習熟度による量的な相違は見られない。
- ②母語話者・学習者ともに【逆接】【並列】の順に多いが、母語話者は【列挙】【結論】【転換】、学習者は【並列】【順接】【例示】の使用が顕著であり、使用するカテゴリーに相違が見られる。
- ③母語話者・学習者間で、接続表現の異なり語数には差が見られないが、使用する接続表現には相違が見られる。
- ④学習者に特徴的なカテゴリーは、上位群より下位群の方が多用しており、日本語習熟度によって使用する接続表現が異なる。また、口語的表現の使用も、習熟度が上がるにつれて顕著に減少している。
- ⑤接続表現と文章の展開との関連については、母語話者が【列挙】【対比】、学習者が【並列】を用いて主張の根拠を整理するという相違が見られる。

アカデミック・ライティングの授業においては、母語話者が使用しない口語的な接続表現、学習者が使用しづらい接続表現の用例と使用方法、不自然な用例の改善方法等について、明示的に指導する必要があることを指摘した*。

キーワード：接続表現、アカデミック・ライティング、日本語母語話者、日本語学習者、習熟度

1. はじめに

接続表現¹は、文章を論理的に組み立てる際に重要な役割を果たすため、ライティング教材でも主要な学習項目の一つとなっている。実際に留学生向けのアカデミック・ライティング教材を

* 本稿は、東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門主催「外国語と日本語との対照言語学的研究」第 35 回研究会での口頭発表（「作文コーパスを用いた日本語教育研究—母語話者と学習者の接続表現の比較—」, 2022 年 3 月 5 日）および 2022 年度日本語教育学会秋季大会での口頭発表（伊集院 2022）の内容を発展させたものであり、JSPS 科研費 JP22H00667, JP21H04417, JP19H01273, JP18K00680, JP15K02633, JP25370705, JP19720119 の助成を受けて行われた。また、本稿の一部は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」（プロジェクトリーダー：石黒圭）のサブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果である。本研究の枠組みは、李在鎬氏（早稲田大学大学院）、小森和子氏（明治大学）、青木優子氏（東京福祉大学）をはじめとする共同研究者との共同研究で得られた知見に負うところが大きい。共同研究者の皆様、作文データ収集の協力者および作文執筆者の皆様に、記して感謝申し上げます。

¹ 本稿では、「文の先頭に置かれ、先行文脈と後続文脈のあいだに橋を架ける言葉」（石黒 2016: 1）を「接続表現」と呼ぶ。分析対象とする接続表現については、3.2 節の表 1 に示す。

分析してみると、接続表現に言及していない教材は見当たらず、接続表現とライティング学習には強い結びつきがあることがわかる²。日本語学習者の作文を対象とした接続表現の研究も既に多くの成果があるが、学習者作文に現れる接続表現は、学習者の日本語習得レベルや学習環境、分析対象とする作文の数やテーマ、執筆状況等、さまざまな要因の影響を受け、接続表現の量や種類も研究によって異なるため、その結論は一樣でない。また、先行研究には、条件統制が異なるコーパス間の比較や言語能力を示す外部指標の不足に起因する問題 (Ishikawa 2010, 今尾 2019)、分析データの規模の問題等が存在する。

本稿では、同一課題、同一条件で大学生によって執筆された計 288 編 (日本語母語話者 144 編、海外で学ぶ中級レベル以上の日本語学習者 144 編) を対象に、文頭の接続表現の使用にどのような特徴が見られるか分析し、先行研究の結果と比較する。また、日本語習熟度による相違という観点から、ライティング指導上の留意点に関して検討する。

2. 先行研究

本節では、本研究の方法と同様に、日本語母語話者と中級・上級レベルの学習者のアカデミック・ライティングを対象に、接続表現の出現数やその種類を比較した先行研究を取り上げる。

接続表現の出現数について、先行研究では、学習者の方が母語話者より多用しているとの指摘が数多く見られる (範 2010, 浅井 2003, 阿辺川ほか 2021 等)。範 (2010) は、国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver.2 正式公開版」に収録されている母語話者 (44 編) と中級レベルの中国人学習者 (43 編) の「喫煙規制の是非」に関する意見文を分析対象データとし、市川 (1978) による 8 類型に基づき、分析したものである。浅井 (2003) も同様に、市川 (1978) に基づき、母語話者 (30 編) と上級レベルの中国人学習者 (32 編) による「ゴミ問題の現状と解決法」をテーマとした授業レポートを分析している。また、阿辺川ほか (2021) は、BCCWJ, 人文・社会科学論文, 科学技術論文, 学習者論文および学習者作文からなるコーパスを対象に、独自に選定した 523 の接続表現項目 (指示語系 242 項目を含む) を分析した大規模調査であるが、これらの先行研究ではいずれも、学習者の方が母語話者より接続表現の出現頻度が高いという結果が示されている。一方、徐 (2020) は、学術論文 (『日本語教育』に掲載された母語話者による研究論文と中国語を母語とする学習者の修士論文 90 本ずつ) を対象に分析し、接続詞の延べ語数と総文字数の比率はほぼ同じであったと述べている。このように、出現数の多寡に関する結果は一樣でなく、分析対象とする文章のジャンルや接続表現の種類の相違も踏まえつつ、検証を重ねる必要があると言える。

² 具体的な事例として、日本国内の複数の大学での使用が確認されている以下の 5 種の教材を確認したところ、いずれも 20 項目から 29 項目の接続表現が学習項目として取り上げられていた。

浜田麻理・平尾得子・油井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版／佐々木瑞江・細井和代・藤尾喜代子 (2006) 『大学で学ぶための日本語ライティング 短文からレポートまで』ジャパンタイムズ／田中真理・阿部新 (2014) 『GOOD WRITING へのパスポート』くろしお出版／小森万里・三井久美子 (2016) 『ここがポイント! レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版／伊集院郁子・高野愛子 (2020) 『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク出版

続いて、接続表現のカテゴリー別の多寡に関しては、浅井（2003）、範（2010）ともに、母語話者は「添加型」（「また」「そして」等）、「逆接型」（「しかし」「だが」等）、「同列型」（「たとえば」「つまり」等）の順に多く、学習者は、浅井（2003）では「添加型」「逆接型」「順接型」（「だから」「それで」等）の順、範（2010）では「順接型」「添加型」「逆接型」の順と、ほぼ同様の結果が示されている³。また、両者ともに、学習者による「順接型」や口語的表現の多用を指摘している。

しかし、接続表現の個別の項目に関しては、範（2010）は、母語話者が「しかし」「また」「そして」、学習者が「だから」「でも」「また」の順、浅井（2003）は、母語話者が「また」「しかし」「まず」、学習者が「しかし」「また」「たとえば」の順となっており、相違も見られる。「JCK 作文コーパス」（<http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>）に収録されている意見文（晩婚化の原因とその展望に関する 2000 字の意見文）の分析では、母語話者は「また」「しかし」「そして」、中国語母語話者は「そして」「でも」「たとえば」、韓国語母語話者は「そして」「また」「しかし」の順に出現していることが示されており（俵山 2017: 149）、母語話者が「しかし」「また」を高頻度に用いる点では共通しているようである。なお、接続表現の異なり語数に関しては、学習者の方が多様であるという指摘（浅井 2003）も、学習者は多様な表現の習得に至っていないとの指摘（阿辺川ほか 2021）も見られる。これらの点に関しては、第 4 節で本研究データの分析結果と照らし合わせて検討する。

最後に、学習者の習熟度と接続表現の使用状況を検討した先行研究として、李ほか（2024）に言及する。李ほか（2024）は、I-JAS に収録されている学習者のエッセイデータから、客観テストの結果と学習者作文評価システム「*jWriter*」の評定値に基づいて選定した 305 編を対象に習熟度別に分析した結果、初級は「例示」「順接」「逆接」、中級は「並列・列挙」、上級は「対比」「譲歩」「まとめ・言い換え」⁴と対応関係が見られることを明らかにしたうえで、これらの特徴が I-JAS に特有なものなのか学習者データに普遍的に見られるものなのか、別のコーパスを利用して検証を重ねる必要があることを指摘している。

これらの先行研究の結果を踏まえ、本研究では、母語話者データも含めて収集された作文データを対象に、母語話者と学習者の接続表現の使用状況、カテゴリーおよび接続表現項目の特徴を明らかにしたうえで、習熟度による相違に関しても検討を加え、日本語教育での指導の際の留意点に関して考察する。

3. 分析の概要

3.1 作文データ

本研究で分析に用いるデータは、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」

³ 浅井（2003）および範（2010）は、市川（1978）に基づいているため、石黒（2008, 2016）に基づく本研究の分類とは、カテゴリー名（分類名）が異なる場合がある。具体的には、市川（1978）の「添加」は、本研究の【並列】【列挙】、「同列」は【例示】【換言】に該当する。

⁴ 李ほか（2024）の「並列・列挙」は本稿の表 1 の【並列】と【列挙】をまとめたもので市川（1978）の「添加」に当たるもの、「まとめ・言い換え」は【結論】と【換言_つまり系】をまとめたものである。

に収録されている日本語母語話者 (JP) による 134 編, 中国語母語話者 (CN) による 57 編, 韓国語母語話者 (KR) による 55 編, および “The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS)” から抽出した英語母語話者 (EN) による 32 編 (以上は全てオンラインで公開されているデータ)⁵ に加え, 同一の手法で追加収集した日本語母語話者による 10 編の計 288 編である。いずれも「インターネット時代における新聞の必要性」をテーマに, 辞書等は使用せず, 教室内で 1 時間以内に, 手書きで原稿用紙に執筆されたものである。

3.2 接続表現リスト

分析対象とした接続表現は, 表 1 に示す 5 類 11 種 23 系統の 125 項目 (異表記含め 199 項目)⁶ である。石黒 (2008, 2016) が示す 4 類 10 種を参考に, 【その他】として, 多くの作文教材で指導項目にあがる【譲歩】(「たしかに」「もちろん」「むしろ」「なるほど」) を加えたものである。第 4 節の分析では, これらの接続表現が文頭に出現している場合は, 機能の判定をせずに網羅的に拾い上げることとし, 実際に作文でどのように機能しているかに関しては, 第 5 節の考察で検討する⁷。

3.3 分析の手順

分析には, 計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder 3」(<https://kncoder.net/>) を用い, 表 1 の接続表現が文の冒頭に出現する用例を強制抽出した後, 誤抽出の修正 (例: 「かつ」として抽出された「かつて」や「そのための手段として」のように名詞を修飾している「そのための」の削除) を行った。また, 同一文字列を含む別項目 (例: 「それで」で抽出された「それでは」「それでも」, 「また」で抽出された「または」) は, 目視で分類し直した。最後に, 同一形式で複数のカテゴリーに分類し得る項目 (例: 【論理_ 順接_ それなら系】と【展開_ 転換_ では系】) に分類可能な「それでは」に関して, 前後文脈に基づいて機能を検討し, コーディングを完成させた。

⁵「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」には, 日本語を母語とする大学生 (134 名) と海外で日本語を学ぶ大学生 (台湾 57 名, 韓国 55 名) が日本語で執筆した意見文が収録されており, “MOECS” には, オーストラリアで日本語を学ぶ英語を母語とする大学生が執筆した日本語作文 32 編のほかに英語母語話者による英作文 120 編, 日本人英語学習者による英作文 79 編が収録されている。日本語母語話者データは 2007 年, 日本語学習者データは台湾でのデータ収集が 2007 年, 韓国 2009 年, オーストラリア 2014 年である。本稿では, 便宜上, 中国語母語話者データを CN と表記しているが, 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」では台湾で収集したことを示すために TM が付与されている。なお, 作文データとデータ収集の詳細に関しては, 本稿末尾の「利用データ」に記載のリンク先で確認できる。

⁶ 表 1 は, 本研究の先行研究に当たる伊集院ほか (2020) 及び李ほか (2024) で分析対象とした接続表現より, 分類数・系統数・項目数が多いことを断っておく。これらの先行研究では, 最終的に日本語学習者に簡潔な分類を提示することを目的に, 石黒 (2008) の分類の一部を簡略化している。具体的には, 注 4 に記載した変更に加え, 本研究で分析に加えた【転換】と【補足_ ただし系】, 【換言_ むしろ系】が除外されている。

⁷ 学習者の接続表現に不自然さが感じられる場合でも, それが接続表現自体の問題なのか, 文末の呼応等, 後続文における何らかの言語要素の問題なのかを正確に判断するのは困難である。また, 当該接続表現を使用した意図を執筆者に確認することも不可能であるため, まずは誤用か否か等の判断は加えずに, 言語形式に基づいて網羅的に使用例を抽出し, その後に具体的な用例の検討を加えることとした。

表1 分析対象接続表現リスト

【カテゴリー (5類・11種・23系統)】 および接続表現項目 (125項目)		
論理	順接	【だから系】 だから (こそ)・したがって・ゆえに・よって・そのため (に)・それで 【それなら系】 それならば・それでは・すると・そうすると・だとすると・だとしたら・そうしないと・そうでないなら・さもないと (口語的表現: それなら・そうしたら)
	逆接	【しかし系】 しかし (ながら)・だが・でも・それでも・ただ・とはいえ・とはいもの・そうは いうものの・だからといって (口語的表現: ですが・けど・けれど (も)・だけど) 【ところが系】 ところが (それ) にもかかわらず (口語的表現: それなのに)
整理	並列	【そして系】 そして・それから・また 【それに系】 それに・それにくわえて・そればかりか・そのうえ (に)・しかも・ひいては 【かつ系】 かつ・および・ならびに
		対比
	列挙	【第一に系】 第一に・第二に・第三に・第四に・一つ目に・二つ目に・三つ目に・四つ目に・最後に 【最初に系】 最初に・はじめに・つづいて・ついで・その後 【まず系】 まず (は)・つぎに・さらに
		換言
	理解	例示
補足		【なぜなら系】 なぜなら (ば)・なぜかという・なにしろ・なにせ・というのは・というもの (口語的表現: だって) 【ただし系】 ただし・もっとも・なお・ちなみに
展開	転換	【さて系】 さて・ところで 【では系】 それでは・では
	結論	【このように系】 このように・こうして・かくして・以上・結局 【とにかく系】 とにかく・いづれにしても・いづれにしる・どっちにしても・どっちみち
その他	譲歩	【たしかに系】 たしかに・もちろん・むろん・なるほど

注1: 項目は代表系で示されている。例えば, 【展開_結論_このように系】の「以上」には, 「以上のことから」「以上の点から」「以上の理由で」のような派生形も含まれる。

注2: 「口語的表現」か否かは, 複数の教材を参考に, 青木優子氏 (東京福祉大学) と2名で判定した。

4. 分析結果

4.1 接続表現の出現状況の概要

図1に接続表現の出現分布, 表2-1, 2-2に分析データの概要を示す。図1より, 本データにおける接続表現の最頻値は5, 次が7で, 中央値は6である。表2-1は学習者の母語ごとに集計した結果, 表2-2は学習者の習熟度ごとに144名を3分の1ずつに分類した際の集計結果である。習熟度の判断には, 筑波大学留学生センターで開発された日本語能力簡易試験 (SPOT ver.2) の点数を用いた⁸。

⁸ 本研究の学習者作文は, 台湾, 韓国, オーストラリアの大学で, 旧日本語能力試験2級相当以上の学習者を募集して収集したもので, 実際の習熟度を知る目安としてSPOT ver.2を利用した。SPOT ver.2は, データ収集当時存在していた用紙版のテストで, 旧日本語能力試験1級レベルと2級レベルを識別できる難易度

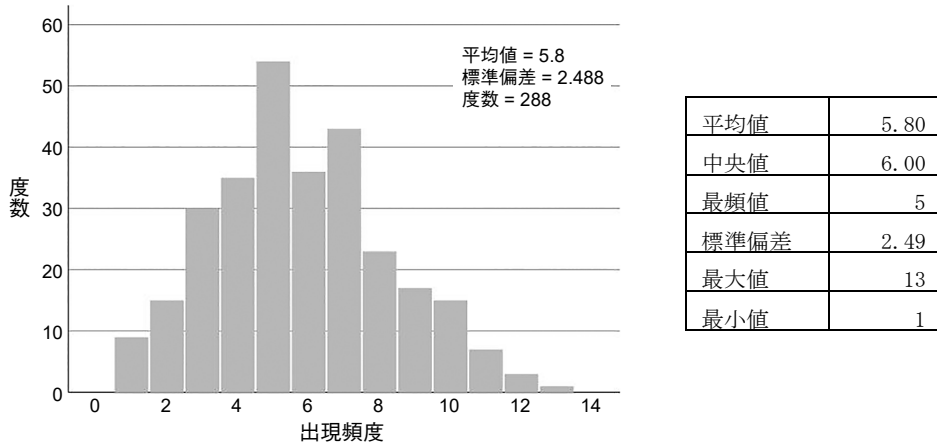


図1 接続表現の出現分布

表 2-1 より、総文数に占める接続表現の出現率は JP が 34.2%、CN が 29.2%、KR が 31.4%、EN が 29.2%（学習者群の平均は 30.0%）と算出される。段落数、文数、文字数をみると、母語群の方が学習者群より、1編当たりの段落数、文数ともに少なく、文字数は多くなっていることから、母語話者作文の方が長い文、少ない段落数で構成されており、文頭に置かれる接続表現の数は多いと言える。文頭に接続表現が置かれる文数に関し、イエーツの補正を用いたカイ二乗検定で分析したところ、母語群と学習者群で有意な偏りが見られた ($\chi^2(1)=10.241, p<.01, \phi=.045$)。また、多重比較の結果、JP・KR 間では偏りは見られなかったが ($\chi^2(1)=2.321, p=.128, \phi=.026$)、JP・CN 間 ($\chi^2(1)=8.666, p<.05, \phi=.049$)、JP・EN 間 ($\chi^2(1)=5.794, p<.05, \phi=.043$) では、接続表現の使用に有意な偏りが見られた⁹。

市川（1978）の 8 類型に基づき、本研究と同様に 800 字程度の意見文の文頭の接続表現を分析した浅井（2003）では、JP が 22.87%、CN が 24.92%、範（2010）では JP が 24.6%、CN が 28.4% であったことから、本研究データは JP・CN とともに先行研究より接続表現の出現率が高く、また、母語群（JP）の方が学習者群（CN, KR, EN）より高いという結果となった。

また、表 2-2 より、日本語習熟度が高いほど、段落数と文数が少なく、文字数は多くなっていることが確認できる。しかし、接続表現の使用数に関しては、学習者の習熟度（上位群、中位群、下位群）による有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(2)=3.823, p=.148, V=.037$)。

のものである。開発者の小林典子氏（元筑波大学・教授）に確認したところ、経験的にはおおよその目安として 60 点以上が 1 級レベルとのことであった。本データの平均点は、上位群が 59.9 点、中位群が 50.1 点、下位群が 37.3 点である。

⁹ ボンフェローニの調整を行い、 $p<0.017 (=0.05 \div 3)$ の場合を有意とした。

表 2-1 分析データの概要（母語ごと）

母語／作文数		段落数	文数	文字数	接続表現数
		1編当たりの平均			
母語群 日本語：JP	144	594	2476	112812	846
		4.13	17.19	783.42	5.88
学習者群	144	651	2744	102348	823
		4.52	19.06	710.75	5.72
中国語：CN	57	253	1107	41386	323
		4.44	19.42	726.07	5.67
韓国語：KR	55	244	973	37997	306
		4.44	17.69	690.85	5.56
英語：EN	32	154	664	22965	194
		4.81	20.75	717.66	6.06
合計	288	1245	5220	215160	1669
		4.32	18.13	747.08	5.80

表 2-2 分析データの概要（日本語習熟度ごと）

習熟度／作文数		段落数	文数	文字数	接続表現数
		1編当たりの平均			
母語群	144	594	2476	112812	846
		4.13	17.19	783.42	5.88
学習者群	144	651	2744	102348	823
		4.52	19.06	710.75	5.72
上位群	48	205	857	35086	236
		4.27	17.85	730.96	4.92
中位群	48	222	926	33992	293
		4.63	19.29	708.17	6.10
下位群	48	224	961	33270	294
		4.67	20.02	693.13	6.13
合計	288	1245	5220	215160	1669
		4.32	18.13	747.08	5.80

以上より、本データは先行研究よりも接続表現の出現率が高く、さらに母語群の方が学習者群より高いこと、学習者の習熟度による量的な差は見られないことが明らかとなった。石黒ほか(2009)では、学術雑誌の論文の文頭の接続表現は25.5%であり、「論理性が重視される学術的な内容の文章・談話が接続表現との相性がよい」(p.79)と指摘されている。本研究データでは、調査等に基づいて論拠を集め、時間をかけて論理を練り上げていく「論文」よりも、さらに多くの接続表現が用いられている。頭の中にある知識に基づいて根拠を組み立て、限られた時間で主張をまとめ上げる必要のある「意見文」では、できるだけ短時間で文章を展開させることを意識するために、文頭の接続表現の機能に頼る割合が高くなるのではないだろうか。時間の制約を設けない状況で執筆された浅井(2003)および範(2010)とは異なり、本研究データは大学受験の小論文科目と類似する環境で執筆されたものである。このような執筆条件の違いも、接続表現の出現の様相に影響を与える要因となると考えられる。また、浅井(2003)および範(2010)が分

析対象とした接続表現の項目数は明らかでないが、出現項目数は前者が54項目、後者が64項目、本研究が82項目（4.3節で後述）であることから、対象とした接続表現の種類や項目の多さが結果に影響している可能性もある。

なお、学習者群より母語群の方がその割合が高い要因に関しては、効果量が小さいことから実質的な差はない可能性もある一方、日本語に比して中国語、英語は接続表現の任意性が高いとの指摘（井上 2003, 興水 1985, 西原 1990）や、日本人大学生を対象とした外国語の作文研究で、日本人学習者の方が接続表現の使用が多いとの研究¹⁰も見られることから、母語の特性との関係も否定はできないだろう。しかし、母語の要因を論じるには、異なる言語における接続表現の認定基準を検討したうえで、学習者の母語データも分析する必要があるため、本稿で論じることはできない。今後の課題としたい。

4.2 接続表現のカテゴリー

続いて、接続表現のカテゴリーに関してカイ二乗検定を行った結果、母語群と学習者群で有意な偏りが見られたため ($\chi^2(10)=97.786, p<.001, V=.242$) 残差分析を行ったところ、表3のとおり、両者ともに【逆接】【並列】の順で出現しているが、母語群は【列挙】【結論】【転換】、学習者群は【並列】【順接】【例示】が有意に多いことがわかった。さらに学習者の習熟度別に見ると、学習者群に特徴的な三つのカテゴリーは上位群より下位群の方が多用する傾向も確認できた。また、母語群・学習者群の合計の出現順が1位の【逆接】は、【しかし系】390例に対して【ところが系】は9例のみ、2位の【並列】は【そして系】285例に対して【それに系】61例、3位の【列挙】は【まず系】133例に対して【第一に系】36例、【最初に系】19例、4位の【順接】は【だから系】150例に対して【それなら系】22例と、系統によって、用いられる頻度に大きな偏りがあることがわかった。

表3 カテゴリー別接続表現出現数

	逆接	並列**	列挙***	順接***	譲歩	結論***	例示*	対比	換言	補足	転換***	合計
母語群	190	154	119	51	79	79	41	46	36	22	29	846
学習者群	209	192	69	121	61	25	60	30	25	23	8	823
上位群	65	47	22	23	22	8	16	14	10	7	2	236
中位群	68	69	25	47	24	10	22	9	10	7	2	293
下位群	76	76	22	51	15	7	22	7	5	9	4	294
合計	399	346	188	172	140	104	101	76	61	45	37	1669

注：| 調整済み標準化残差 | >1.96 * $p<.05$
 | 調整済み標準化残差 | >2.56 ** $p<.01$
 | 調整済み標準化残差 | >3.29 *** $p<.001$
 (竹内・水本 2014: 151)

¹⁰ 日本人中国語学習者と中国語母語話者の中国語作文を分析した徐（2022）、日本人英語学習者と英語母語話者の英作文を比較した Narita et al.（2004）等。

浅井 (2003) および範 (2010) では、JP は「添加」「逆接」「同列」の順であったが、「添加」は本研究の【並列】【列挙】、「同列」は【例示】【換言】に該当することを考慮に入れると、上位 2 位までの結果は一致していると言える。学習者に関しては、順位の入れ替わりは見られるが、上位 3 位までに入るカテゴリーは完全に一致している。

先行研究と本研究データの分析結果から、日本語意見文は、読み手の推論を助けるための【論理_逆接_しかし系】に加え、母語話者は、複雑な内容を読みやすく示すための【整理_列挙_まず系】、学習者は【整理_並列_そして系】と【論理_順接_だから系】の接続表現を主軸にして展開していると考えられる。各カテゴリーに出現する具体的な項目に関しては次節で確認する。

4.3 接続表現の項目

次ページの表 4、表 5 は、母語群、学習者群それぞれの接続表現項目を出現頻度 1 位より高頻度順に並べたものである。第 2 節で挙げた浅井 (2003)、範 (2010)、俵山 (2017) の結果と同様に、母語群では「しかし」「また」の頻度が高いことがわかる。この結果は、石黒ほか (2009) における論文データを対象とした接続表現の頻度順とも一致しており、アカデミック・ライティングには「しかし」「また」が不可欠と言えるであろう。また、学習者による高頻度順上位 6 位までの出現項目は、浅井 (2003)、範 (2010)、俵山 (2017) の上位 3 位までを網羅するものであり、これらの項目も、日本語学習者の意見文に特徴的な項目として認定できると思われる。

母語群が学習者群の 2 倍以上使用している項目としては、【列挙】の「つぎに」「第一／第二／第三に」、【譲歩】の「たしかに」、【結論】の「以上」「このように」、【対比】の「一方」、【換言】の「すなわち」、【転換】の「では」「さて」が挙げられる。また、「ただ」「よって」「というもの」は母語話者にのみ用いられており、学習者の使用は皆無である。

一方、学習者群の方は、【順接】の「だから」「それで」に加え、【並列】の「それに」「それから」「そのうえ」、【逆接】の「でも」「けれど」「だけど」、【例示】の「とくに」が顕著であり、「でも」「それで」「だけど」は母語話者の使用が見られない。母語別に見ると、「それで」は KR (32 例中 25 例)、「だから」は CN (52 例中 21 例) に多く、「理由—帰結」を示す形式として、韓国語母語話者は「それで」、中国語母語話者は「だから」の使用が多いとする俵山 (2017) の分析結果と同様であった。また、「最後に」は EN (13 例中 7 例) に顕著であった¹¹。

ここで、前節で母語群と学習者群に差が見られなかった【逆接】の項目を確認すると、「でも」「けど (けれど (も), だけど)」「ですが」のような口語的表現は、母語群が 4 例のところ、学習者群は 82 例であり、多くの先行研究で指摘されるレジスター (言語使用域) に関わる問題は本研究データでも同様に見られることがわかる。レジスターに関わる問題は、英語の先行研究でも古くから指摘されており (Granger and Tyson 1996: 23)、学習言語に広く見られる現象だと思われる。本研究データでは、下位群 47、中位群 22、上位群 13 と習熟度が上がるにつれてレジスター

¹¹ 表 5 の太字項目のうち、「もちろん」の用法については第 5 節で扱う。

表4 母語群による高頻度順出現項目

項目	母語群	学習者群	総計
しかし	151	94	245
また	97	53	150
たしかに	60	25	85
以上	54	12	66
そして	38	74	112
まず	36	31	67
一方	34	14	48
たとえば	28	36	64
さらに	27	18	45
つまり	22	12	34
このように	19	6	25
では	18	4	22
つぎに	17	4	21
もちろん	16	35	51
そのため	14	17	31
なぜなら	14	14	28
第二に	14	1	15
だが	12	16	28
したがって	11	7	18
ただ	10	0	10
よって	10	0	10
第一に	8	1	9
それに	7	28	35
しかも	7	5	12
第三に	7	1	8
とくに	6	21	27
最後に	6	13	19
すなわち	6	2	8
というもの	6	0	6
だから	5	52	57
そのうえ	5	10	15
それにたいして	5	8	13
こうして	5	5	10
それでも	5	5	10
実際	5	3	8
さて	5	1	6

表5 学習者群による高頻度順出現項目

項目	学習者群	母語群	総計
しかし	94	151	245
そして	74	38	112
でも	64	0	64
また	53	97	150
だから	52	5	57
たとえば	36	28	64
もちろん	35	16	51
それで	32	0	32
まず	31	36	67
それに	28	7	35
たしかに	25	60	85
それから	22	1	23
とくに	21	6	27
さらに	18	27	45
そのため	17	14	31
だが	16	12	28
けれど	15	2	17
一方	14	34	48
なぜなら	14	14	28
最後に	13	6	19
以上	12	54	66
つまり	12	22	34
そのうえ	10	5	15
それにたいして	8	5	13
したがって	7	11	18
このように	6	19	25
しかも	5	7	12
こうして	5	5	10
それでも	5	5	10
だけど	5	0	5

注：母語群または学習者群の出現頻度が5以上の項目を示してある。また、母語群と学習者群で2倍以上の差がある項目は太字で示した。

の問題が改善されていく様子も確認できた。

なお、出現する接続表現の多様性に関しては、調査した125項目のうち、全部で82項目が出現しており、そのうち母語群は64項目、学習者群は68項目を使用しており、量的な差は見られなかった。上記で指摘したとおり、母語群は学習者群に見られた68項目のうち、レジスターに問題が見られる項目をはじめ、計18項目（「でも／それで／だけど／そうしたら／それとも／な

ぜかという／ぎゃくに／けど／そうしないと／それなのに」等) を使用せず、学習者群は母語群に見られた 64 項目のうち 14 項目(「ただ／よって／というのも／二つ目に／なるほど／ゆえに／事実／反対に／あるいは／もしくは」等) を使用していない。これらの分析結果から、両者の使用項目は異なり語数においては同程度であるが、使用する項目には違いが見られることが明らかになった。日本語教育においては、アカデミック・ライティングで母語話者が使用しない口語的な接続表現は何かを明示し、学習者が使用しづらい接続表現の用法を用例に基づいて指導する必要があると言えるだろう。

5. 考察

第 4 節では、4.1 で本研究データの特徴と接続表現の出現率を確認し、4.2 で母語群と学習者群の使用するカテゴリーの特徴を概観し、4.3 ではさらに接続表現項目の詳細を検討しつつ、先行研究との比較を行った。本節では、習熟度による接続表現の相違や接続表現を手掛かりとした意見文の論理構成、誤用に関する検討を加え、日本語教育での指導上の留意点に関して考察を試みる。

はじめに、日本語習熟度(母語群、上位群、中位群、下位群)と接続表現項目の対応関係を視覚化するために、「KH Coder3」を用いて対応分析¹²を行った(図 2)。

頭の中にある複雑な物事を整理して書くのに適する【整理】の接続表現(石黒 2008: 88)に着目すると、母語群は【列挙】【対比】、学習者群は【並列】との対応関係が確認できる。この結果が文章展開にいかんにか反映されているか確認するために、「新聞の必要性」を主張するための根拠が整理されている段落を以下に例示する¹³。

(1) 〈学習者群 (CN 上位群) の【並列】〉(利用データ① TM024 文番号 05 から 08)

新聞と雑誌の一つ目の独特性はその触感と嗅い、言わば真実感である。毎朝、コーヒー或は牛奶を飲みながら、嶄新な紙の香りを楽しむのは多くの人々にとって、一日の始まりを感じるには不可欠なことである。そして、新聞や雑誌をのんびりと巡るのも朝からパソコンを使うのより、生きる実感を味わせてくれるのではないだろうか。

それから、近年にはインターネットの発達につれ、ほぼあらゆる仕事はこれによって片づけられるようになった。

(2) 〈学習者群 (EN 中位群) の【並列】【列挙】〉(利用データ② AUJ009jp 文番号 10 から 16)

ならば、新聞やざっしなどはいらなくなるのだろうか。こう言うふうの意見を持つ人がいるかもしれないが私にとって新聞がなかったら、私はたぶんニュースを読むことが少なくなるだろう。

¹² 対応分析は、データ表の行や列に含まれる情報を少数の成分に圧縮し、それらの関係を散布図上に布置することで、視覚的なデータの俯瞰を可能にする分析手法である(石川ほか 2010: 245)。図 2 は、成分 1 (第 1 次元) の寄与率は 76.93%、成分 2 (第 2 次元) の寄与率は 18.14% で、累積寄与率が 95.07% となり、十分な説明力があると判断できる。石川ほか (2010: 254) によると、「大まかな目安として第 2 次元までで 80% 程度の値が出ていればおおむね分析はうまくいっていると推定される」とのことである。

¹³ 例は、誤用も含めて原文のまま示す。文頭の一字下げは、段落冒頭であることを示している。また、例 (1) から (4) では、下線の種類によってカテゴリーを示している。

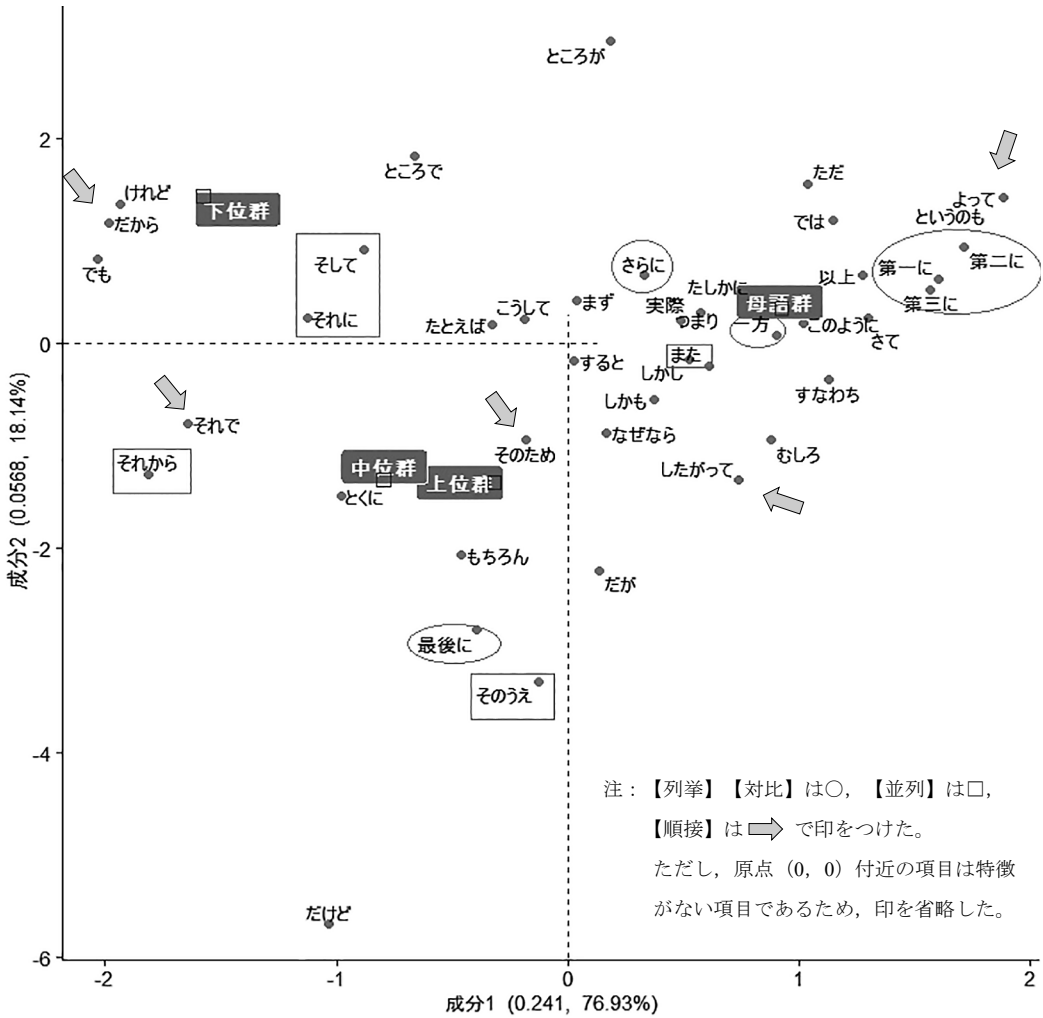


図2 習熟度と接続表現項目(頻度5以上)の対応分析

それに私はネットではなく紙の新聞とか雑誌とか本の方が読みやすいと思う。

それから、紙に書いたものはもっと気持ちがかんじられると思う。〈中略〉

さいごに、もし私たちはなんでもインターネットを使えば私たちほかのコミュニケーションのう
 りよくはへたくなるだろう。

(3) 〈母語群の【列挙】【対比】【換言】【順接】〉(利用データ①JP002文番号01から10)

私は、インターネットが自由に使えるようになった今も、新聞や雑誌は必要であると考え
 る。以下に理由を述べる。

第一に、新聞・雑誌と異なり、インターネットがパソコン等の機械が必要である点がある。

すなわち、インターネットを使うには通信設備が必要であり、電波や回線が届かない場合、機器が壊れている場合、金銭的に高価である故に設備を整えられない場合には、そもそも使用できない。これに対して新聞や雑誌は、流通が整っている地域であれば、店で手軽に手に入れられる。したがって、インターネットがあるからといって新聞・雑誌は不要とならない。

第二に、インターネットは、自らが主体的にコンテンツに接触するのに対し、新聞や雑誌は受動的なメディアである点がある。それに対して、インターネットは、情報を得ようとする側が、検索エンジン等を使って必要な情報を主体的に取得していくものである。こうした違いから、新聞や雑誌は、企業がある価値感を提案して消費者のニーズを生み出すという役割があり、インターネットによって不要となるものでない。

第三に、インターネットは主に画面によって情報を流すものである点がある。

(4) 〈母語群の【列挙】【換言】【転換】〉(利用データ①JP003 文番号 01 から 06)

私は、新聞や雑誌による情報伝達手段は現在においても必要と考える。その根拠として、インターネットによる情報配信手段しかなくなってしまうと、情報伝達の目的が達成できなくなってしまうという点が挙げられる。

では、情報伝達の目的とは何だろうか。私は、第一に、「公正かつ公平であり、取り上げる内容に偏りのない」社会現象を伝達することがこれに該当すると考える。第二に、読み手の知を構築することもこれに該当すると考える。すなわち、このような目的をインターネットニュースのみでは達成することができないため、新聞等が必要だと考えるのである。

例 (1) ~ (4) より、頭の中の情報を根拠として整理する際、学習者群は【並列】で文と文をつないで論理を展開しているが、母語群は段落単位で【列挙】、段落内で【対比】の構造を示しつつ、わかりやすく言い換えるための【換言】や、議論をいったんまとめて結論を提示する【順接】、話題を明記するための【転換】も利用して、論理を展開していることが見て取れる。このような事例の分析をライティング指導にも取り入れることによって、情報のつなげ方を俯瞰して考える練習につながるのではないだろうか。

続いて、図2に矢印で示した【論理_順接】に着目する。4.2節では、【順接】は、学習者群に特徴的な項目であると同時に、習熟度が低いほど多用する傾向が見られることを指摘した(表3)。李ほか(2024)では、初級は「だから」が顕著だが、中級では「それで」、上級では「そのため」が加わっていくと指摘されているが、図2からも同様の特徴が見られる。

以下は、石黒(2008: 62-63)から抜粋した「だから」「それで」「そのため」「したがって」「よって」の各項目に関する記述である(下線は筆者による)。図2と照らし合わせると、下位群は感情的な表現で結論に強引に結びつけ、中位群はややくだけた文体で因果関係を示し、上位群は事実として客観的に伝え、母語群は論理的必然性の高い結論に帰着させる表現を用いるという段階性が確認できる。

「だから」: 書き手が顔を出し、用意していた結論に強引に結びつけるような語感。感情的な

表現。

「それで」：「だから」と同様に話し言葉や、書き言葉でも比較的くだけた文体に使用される。

「だから」のような、書き手の責任で因果関係を結びつけるものとは異なり、「そのため」と同様に対象そのものの論理によって結ばれる因果関係

「そのため」：「だから」の語感を避けるために使い、因果関係を事実として客観的に伝える
「したがって」「よって」：論文やレポートなどで、論理的必然性の高い結論に帰着させる

これらの特徴から、習熟度が上がるにつれて、アカデミック・ライティングに適切な接続表現が徐々に使用できるようになる傾向が窺えるものの、母語群と学習者群には使用する項目に相違があると言える。日本語教育においては、アカデミック・ライティングにふさわしい多様な表現や段落間・段落内の情報整理について段階的に習得していけるよう、繰り返し意識づけする機会を作る必要があるだろう。このような意識づけは作文授業だけでは限界があるため、読解授業においてアカデミックな文章を扱う際に、初級・中級の読み物との言語表現の違いや段落間・段落内の情報の関係に着目させるなどの方法で、理解と産出の双方向からアプローチするのが効果的だと思われる。

最後に、学習者による産出の難しさの実態を検討するために、李ほか（2024）で上級レベルとの対応関係が見られた「対比」「譲歩」「まとめ・言い換え」（本研究の【結論】と【換言】）の用例を精査する。これらは、本研究では母語群に特徴的であったが、用例を精査したところ、学習者の用例には、母語話者とは異なる用法で使用されている例や改善の必要性がある例が数多く含まれていることがわかった。以下、【対比】【譲歩】【結論】【換言】の順に例を挙げて詳述する。

【対比】の用例：

【対比_一方系】の「一方」は、母語群と対応関係が見られる項目である（図2）。学習者群による使用を確認すると、母語群に比べて産出は少ないものの、下位群3例、中位群4例、上位群7例と、習熟度が上がるにつれて産出が増え、かつ誤用も見られない。それに対し、【対比_または系】は、学習者群による5例（下位群1例、中位群2例、上位群2例）は全て誤用であり、学習者にとって適切に使用するのが難しい項目であることがわかった。誤用の内訳としては、「また」が正用となる「または」が2例と「それとも」が1例、「または」が正用となる「それとも」が2例である。

(5) 〈学習者群の【対比_または系】〉（利用データ① KR051 文番号 12 から 13）¹⁴

だからインターネット上のじょうほは信用することが難しいのだ。または（→また）、じょうほをほかんすることも考えるべきだ。

(6) 〈学習者群の【対比_または系】〉（利用データ① KR017 文番号 05 から 06）

インターネットのニュースを見るためにはコンピューターが必要である。それとも（→また

¹⁴ 着目する表現に下線を引き、（ ）内に改善例を追記して用例を示す。

は)、パソコンが必要である。

このような誤用は、「また」と「または」は別の機能を有しており、「まず」と「まずは」のよ
うな関係とは異なることや、文頭の「それとも」は疑問文に使われることを明示的に指導すれば、
比較的容易に防げる誤用だと思われる。

【譲歩】の用例：

母語群は「たしかに」、中級・上級の学習者は「もちろん」と対応関係が見られる(図2)。「譲
歩」の接続表現のうち、母語群の75.9%が「たしかに」¹⁵を用いているのに対し、学習者群は
57.4%が「もちろん」であり、さらに文脈を確認すると【譲歩】として機能していないものも多
く含まれていることがわかった。母語群の「もちろん」の使用例は、16例のうち2文後までに「～
が／しかし」が続く【譲歩】が15例であるが、学習者群は35例のうち12例(上位群3例、中
位群7例、下位群2例)が「当然」の意味で用いており、これらの用法を除くと、学習者群によ
る【譲歩】の数はさらに少なくなる。

(7) 〈母語群の「もちろん」〉(利用データ①JP027 文番号 17 から 19)

このようなデメリットが、IT技術の発達で生じているのである。もちろん「かさばる」「紙
の使用量が膨大だ」というデメリットもあるだろう。しかし社説等個人の意見も入った「ム
ダを省かない」情報媒体は、自らの見識を深める上で重要である。

(8) 〈学習者群の「もちろん」〉(利用データ①TM036 文番号 14 から 16)

やはり、本を見たほうが好きだ。もちろん、個人的な好き嫌いだけでなく、ほかの理由も
ある。インターネットは虚構なもので、その中にある情報は電子化なものだ。

(8)の「もちろん」の用法は誤用ではないが、「もちろん～が、…。／もちろん～。しかし、…。」
という展開パターンが使えるようになれば、意見文の説得力の向上が期待できるため、譲歩とし
て機能する「もちろん」や「たしかに」の用法もライティングの指導に加えるとよいのではない
だろうか。小森(2022)にも、上級の意見文は、対立する立場の利点を明示して「譲歩」したう
えで、主張を支えるさらに強い根拠を示すという論の展開によって説得力が高められているとの
指摘がある。本研究データでも母語話者に特徴的であった【譲歩】は、高度な論理展開を可能に
するため、習熟度の高い学習者には積極的に指導すべきであると思われる。

【結論】と【換言】の用例：

【結論】の「このように」「以上」、【換言】の「すなわち」「つまり」「むしろ」のいずれの項目
も母語群との対応関係が明らかであり、学習者群との関係が見られるのは「こうして」のみであ
るが(図2)、学習者の「こうして」の産出例はすべて不自然さを伴うものであった。その内訳は、

¹⁵ 本研究の利用データ①を用いた「たしかに」の分析については、伊集院(2010)を参照されたい。伊集院
(2010)では、意見文のどの位置でどのように譲歩が機能しているかを明らかにするために、「たしかに」を
詳細に検討している。

「そのため」や「したがって」が適切だと思われるものが3例、「このように」が適切だと思われるものが2例であった。

(9) 〈学習者群の「こうして」〉(利用データ② AUJ0029jp 文番号 03 から 04)

家にインターネットがない所で、図書館やマックドナルズにアクセスできる。こうして (→そのため/したがって)、「新聞や雑誌はいらない」と言える。

(10) 〈学習者群の「こうして」〉(利用データ① TM002 文番号 08 から 09)

もし新聞や雑誌がなくなったら、人はどこかおかしくなった気持ちを感じる可能性もあります。こうして (→このように)、新聞や雑誌は単純な工具ではなく、人の習慣や感情の一つです。

【換言】も同様に、母語群の56.2%が「つまり～のだ/わけだ」の形式で、遠隔共起が想定される「のだ」(尾形2019)とともに使用されているのに対し、学習者群の用例には「のだ/わけだ」が出現しないために、落ち着いた文末形式となっている例が見られた。

(11) 〈母語群の「つまり」〉(利用データ① JP028 文番号 10 から 11)

速報性を重視するため、間違った情報が流れることもあり、私達は情報の取捨選択を絶えず行わなければならない。つまり、インターネットの情報だけに頼るのは危険が潜んでいるのである。

(12) 〈学習者群の「つまり」〉(利用データ② AUJ0011jp 文番号 12 から 13)

インターネットのおかげで、次の日も待つ必要がなかった。つまり、その限りは、新聞や雑誌を読んでも当日におこったニュースが理解出来ないことである (→わけである)。

以上より、接続表現のカテゴリーや項目には、言語習熟度によって段階性が見られること、母語群に比して学習者群の用例が少ないカテゴリーには、文として不完全な用法や母語群とは異なる働きをする用例が散見されることがわかった。読み手の理解を容易にするための【対比】や【換言】、主張の説得力を高めるための【譲歩】や意見文において最も重要な【結論】を導く接続表現に不自然さがある場合、読み手の理解を阻害する要因となり得る。そのため、中級以降の学習者には、これらを意見文の論理展開に効果的に組み込めるよう、文章構成の練り上げと内容の掘り下げを段階的に指導すると同時に、学習者作文に頻出する誤用例を提示し、明示的に修正方法を指導する必要があると考える。

6. まとめと今後の課題

本研究では、条件を統制して収集した大学生による日本語意見文計288編を対象に、母語群と学習者群の接続表現の特徴を量的・質的に分析した。また、執筆者の言語習熟度と使用する接続表現の対応分析を手掛かりに、意見文の展開と使用項目の特徴、学習者による不適切な産出例に着目し、日本語教育上の留意点について考察した。その結果、本研究データからは、以下の特徴が見出された。

- ・ 文頭に接続表現をおく割合は、母語群が 34.2%、学習者群が 30.0% で、母語群の方が学習者群より高く、学習者の習熟度による量的相違は見られない。先行研究よりも接続表現の出現率が高い要因として、分析対象とした接続表現の数や作文の執筆条件の違いが影響した可能性が考えられる。
- ・ 母語話者・学習者ともに【逆接】【並列】の順に多いが、母語話者は【列挙】【結論】【転換】、学習者は【並列】【順接】【例示】の使用が顕著であり、使用するカテゴリーに相違が見られる。
- ・ 先行研究の結果も踏まえると、日本語の意見文は、【論理_逆接_しかし系】に加え、母語話者は、【整理_列挙_まず系】、学習者は【整理_並列_そして系】と【論理_順接_だから系】の接続表現を主軸にして展開していると考えられる。
- ・ 母語群と学習者群の接続表現は、異なり語数は同程度であるが、使用する接続表現には相違がある。顕著な相違として、学習者には、母語話者が使用しない口語的な接続表現の使用が見られる。

さらに、以下の点において、日本語習熟度による相違が明らかになった。

- ・ 学習者に特徴的なカテゴリーは、上位群より下位群が多用している。
- ・ 口語的表現の使用は、習熟度が上がるにつれて顕著に減少している。
- ・ 学習者は主として【並列】を用いて主張を支える根拠を並べ、母語話者は【列挙】や【対比】を用いて根拠の段落を整理するという特徴がある。
- ・ 【順接】の接続表現は、下位群と中位群が「だから」「それで」、上位群が「そのため」、母語群が「したがって」「よって」との対応関係が明らかであり、習熟度が高いほどアカデミック・ライティングに適切な表現を選択している。

最後に、【対比】【譲歩】【結論】【換言】は、母語話者に比して学習者の産出が少ないだけでなく、不自然な用法も散見されることから、日本語教育で用法や用例を明示的に指導することの必要性を指摘した。

本研究の学術的貢献としては、①先行研究が指摘するデータの問題を踏まえて収集された意見文を分析に用いたこと、②先行研究の知見との異同を明らかにしたこと、③客観的なテストの点数をもとに、言語習熟度による接続表現使用の様相の一端を明らかにしたことが挙げられよう。一方で、本研究の限界としては、①母語の影響を論じるにはデータが不足していること、②文の冒頭の接続表現のみを対象とし、文中での使用の様相までは把握できなかったことが挙げられる。今後、習熟度や母語によって文章の結束性を担う接続表現にどのような特徴が見られるのか、異なるコーパスでも検証を重ねていきたい。

参考文献

- 浅井美恵子 (2003) 「論說的文章における接続詞について：日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4: 87-97.

- 阿辺川武・仁科喜久子・八木豊・ホドシチェック, ボル (2021) 「日本語接続表現の計量的分析に基づく指導法の提案」李在鎬 (編) 『データ科学×日本語教育』 182-204. 東京: ひつじ書房.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (編) (2010) 『言語研究のための統計入門』 東京: くろしお出版.
- 石黒圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 東京: 光文社新書.
- 石黒圭 (2016) 『書きたいことがすらすら書ける! 「接続詞」の技術』 東京: 実務教育出版.
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋 (2009) 「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』 12: 73-85.
- 伊集院郁子 (2010) 「意見文における譲歩構造の機能と位置—「確かに」を手がかりに—」『アカデミック・ジャーナル』 2: 101-110.
- 伊集院郁子 (2022) 「日本語母語話者と日本語学習者の作文に見られる接続表現の比較」『2022 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 65-70.
- 伊集院郁子・李在鎬・青木優子・長谷部陽一郎・村田裕美子 (2020) 「複数のコーパス分析に基づく接続詞使用と作文トピックの関係性」『第 22 回専門日本語教育学会研究討論会誌』 6-7.
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 東京: 教育出版.
- 井上優 (2003) 「文接続の比較対照—日本語と中国語」『月刊言語』 32(3): 54-59.
- 今尾康裕 (2019) 「日本の大学生英語学習者によるエッセイでの接続表現を探る: 日本語エッセイ・英語母語話者によるエッセイと比較して」『言語文化共同研究プロジェクト』 2018: 5-23.
- 尾形太郎 (2019) 「「つまり」の機能と文末形式: 学習者による用例を出発点に考える」『日本語教育センター紀要』 15: 16-29.
- 興水優 (1985) 『中国語の語法の話—中国語文法概論—』 東京: 光生館.
- 小森和子 (2022) 「自動評価ツール「jWriter」による作文評価と言語習熟度」『早稲田日本語教育学』 33: 35-49.
- 徐衛 (2020) 「日本語母語話者と学習者の学術論文における接続詞の調査」『花園大学文学部研究紀要』 52: 18-25.
- 徐勤 (2022) 「日本人中国語学習者の作文における接続詞の使用実態: 中国語母語話者による作文との比較」『大阪大学言語文化学』 31: 123-139.
- 竹内理・水本篤 (2014) 『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために』 東京: 松柏社.
- 依山雄司 (2017) 「流れがスムーズになる接続詞の使い方」石黒圭 (編著)・山内博之 (監修) 『わかりやすく書ける作文シラバス』 141-157. 東京: くろしお出版.
- 西原鈴子 (1990) 「日英対照修辭法」『日本語教育』 72: 25-40.
- 範海翔 (2010) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における接続表現に関する比較研究」『言語の普遍性と個性』 1: 87-105.
- 李在鎬・伊集院郁子・村田裕美子・青木優子・長谷部陽一郎 (2024) 「日本語の習熟度と接続表現の使用に関する調査」『早稲田日本語教育学』 36: 259-268.
- Granger, Sylviane and Stephanie Tyson (1996) Connector usage in the English essay writing of native and non-native EFL speakers of English. *World Englishes* 15(1): 17-27.
- Ishikawa, Shin'ichiro (2010) A corpus-based study on Asian learners' use of English linking adverbials. *Themes in Science and Technology Education* 3(1-2): 139-157.
- Narita, Masumi, Chieko Sato and Masatoshi Sugiura (2004) Connector usage in the English essay writing of Japanese EFL learners. *Proceedings of the Fourth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC'04)*: 1171-1174.

利用データ

- ①伊集院郁子 (2011) 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/terms.html> (2023 年 12 月 3 日確認)
- ② Okugiri, Megumi, Ikuko Ijuin and Kazuko Komori (2015) "The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS)" <https://okugiri.wixsite.com/website/corpus-moecs> (2023 年 12 月 3 日確認)

Comparing Connective Expressions in Japanese Opinion Essays: Native Japanese Speakers vs. Learners of Japanese from Chinese, Korean, and English Backgrounds

IJUIN Ikuko

Tokyo University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study analyzes the usage characteristics of connective expressions (125 items) at the sentence beginnings in opinion essays authored by 144 native Japanese-speaking university students and 144 Japanese learners with Chinese, Korean, and English as their native languages. It investigates the differences in usage patterns and writing development based on their Japanese language proficiency levels. The results revealed the following characteristics:

1. The percentage of connective expressions at the beginning of sentences, relative to the total number of sentences, is higher for native speakers (34.2%) than for language learners (30.0%), with no discernible quantitative difference based on learner proficiency levels.
2. Both native speakers and learners are most likely to use “contrast” and “parallelism” techniques. While native speakers employ “enumeration,” “conclusion,” and “transition,” learners prefer “parallelism,” “sequence,” and “illustration.”
3. The number of different connectors is comparable between native speakers and learners, but there are differences in the specific items employed.
4. Learners exhibit a higher frequency of unique categories in lower proficiency compared to higher proficiency groups. The employed connectors vary based on language proficiency levels, and the use of colloquial expressions significantly decreases with proficiency.
5. Native speakers utilize “enumeration” and “comparison” techniques, whereas learners use “parallelism” to organize the basis of their arguments.

The current study emphasizes the necessity of explicit instruction in academic writing classes, targeting colloquial connectors uncommon among native speakers, and providing examples and guidance on challenging connectors for learners, along with suggesting methods to improve inappropriate usage instances.

Keywords: connective expressions, academic writing, native Japanese speakers, Japanese learners, language proficiency